

ヤコブ・ベーメにおける悪の思索

——形而上の悪と人間——

中山 みどり

はじめに

古来より、様々な神話、説話、文学などを通じて悪は具象化されて捉えられ、また哲学的問題として悪に関して思索されてきた。例えば、悪を実体的なものとし、善と悪の二神が闘争し最終的に悪が滅ぼされるとする、ゾロアスター教やマニ教の善悪二元論と、善なる一者の流出という一元論的体系の中で、善のみが存在し悪は存在が欠如したもの、すなわち非存在であるとした新プラトン主義の思索は、悪についての代表的な存在論である。

ところで、「悪とは何か」というアポリアをなぜ人間は問わずにはいられないのであろうか。それは悪が人間の実存に不可避的に深く関与しているからではないだろうか。人間は自己の内面に巣くう悪に苛まれたり、理不尽な悪の脅威に晒され苦悩することから容易には免れがたい。したがって、悪の

存在論、悪の形而上学は、悪が人間の意志、意識、心理、行為の次元と関わり、人間が悪をなす存在であることについての省察を含んでいなければ説得力に乏しいといえよう。

私見によれば、本稿で取り上げるヤコブ・ベーメ(1575-1624)は、形而上的悪の本質について、人間の实存の次元まで射程に入れて考察している。もとより、それをなしたのは彼ひとりではなからう。だが、人間の自由な行為と悪との関連という、カントやバードラー、またシェリングら観念論哲学の悪についての問題意識に一定の影響を与えている点でも、ベーメの悪についての思索は重要性を帯びている。このことは従来あまり注目されて来なかった。

ベーメは、ゲルリッツの靴職人で、敬虔なルター派の信者であった。無学だが空んじる程聖書に親しんでいた。その敬虔なキリスト教信者も、晩年には宗派間の激しい対立から引き起こされた三十年戦争(1618-48)に直面しなければならな

った。そうした荒廃した時代を背景に、彼は個人的な神秘体験を自身の根源的な体験としつつ、聖書を最大の知的源泉にして、現象の背後にある悪の本質の探求をめざしたのである。

本稿では、神、人間、自然を包括する、ペーメが構築した体系のうちに位置づけられている形而上的悪について概観した後、そうした形而上の悪が人間の実存といかなる関係にあると彼が考えたのかを解明したい。その際、創世記に記されたアダムの墮罪神話についてのペーメ解釈の分析が中心となろう。

1. 悪の起源——形而上の悪の省察

はじめに、ペーメが悪について基本的にはどのように理解しているのかをみる。彼は人間をはじめとして、万物のうちに悪が実在することを、自己の内面の省察や万象の観察を通して認識している。例えば、悪の実在に関して『神の本体の三つの原理について』では、以下のように言及されている。

一切の善と悪の起源はそもそも何であらうか。どこから、又はどこを通して悪は悪魔や人間のうちに、同様にすべての被造物の中に入って来るのだろうか。悪魔は聖なる天使だったし、人間もまた善きものとして作られたが、あらゆる被造物においてはいがみ合い、殴り合い、ぶつかり合い、潰

し合い、互いに敵対するという不快なものも見い出されるのであって、すなわち一切の被造物の中には反逆の意志があり、すべての物体は自己自身と一つにまとまらず矛盾しているのである。そのようなことは生き生きと動く生物だけではなく、星辰、エレメント、大地、石、金属や木、葉、草のうちにも見られる。万物の内には毒と悪しきものが存在するが、そうあらねばならない。もしそうではなく、そうした悪しきものが存在しなければ、生命も運動性もなく、色、働き、太い細いも、わずかな知覚もなく、一切は無であらう。⁽¹⁾

このように、あらゆる存在の中で働き、そのもの自身に反抗し、矛盾や内部分裂を引き起こす「反逆の意志」(Widerwille)として悪を捉え、そのような反逆の意志である悪がなければ存在そのものがありえない、というのがペーメの悪についての基本的な見解である。ペーメは倫理・道徳的次元で悪を把握しているのではなく、悪とは自己自身に逆らう力であると考えている。そして、そうした悪は存在を存在たらしめている必須の力として、あらゆる存在の内部で機能しているのである。

ところで、悪は存在しないのではなく、リアルに実在するとするならば、キリスト教の世界観においては、なぜ善なる

神が悪の存在を許すのか、という神と悪との関係性への疑問が浮上するのは避けられない。ペーメは「神だけが善であるならば（マルコ 10,18）、⁽²⁾」から悪は来るのか⁽³⁾、「善のうちには悪への始まりはないのに、どのように永遠の善から悪が生じるのか⁽³⁾」、「なぜ神は悪を消滅させて、善のみが万物のうちに存在するようになさらないのか⁽⁴⁾」などと複数の著作において素朴な疑問を投げかけている。これは、のちにライプニッツが「弁神論」(Theodizee)と命名した神と悪の問題を先取りした問いであるといえる。そして、このような神と悪との関係への問いは、形而上のレベルで悪の起源がどこにあるのかを明らかにしようとする試みに繋がっていくのである。

次に、ペーメの悪の起源に関する考えをみてみよう。

ペーメは悪の起源、悪が実在することの究極の根拠を神に求めている。つまり、善だけではなく、悪も神のうちに包摂されるのである。なぜなら、神は一切を包摂する「全体」(Ganze)であるから⁽⁵⁾、とペーメは考える。悪は、全体である神から排除されることはなく、神のうちにあるべき座を占めるのである。

しかし、注意しなければならないのは、ペーメのいう神とは「底無し」(Ungrund)と呼ばれ、その存在の根拠を持たず、三位一体の人格神に論理的に先行する、存在の範疇を越える究極の神性である点である。ペーメによれば、そ

のような底無しの神が、自己を顕現させることで自己自身を認識しようとする「意志」(Willie)を持つ。この意志の動きによって、神の内なる世界と神の外の世界という異次元の存在の領域が重層的に成立する。神の自由な意志が一切をあらしめるのである。したがって、人格神から天使、宇宙、自然、人間に至るまで、あらゆる存在が底無しの神の意志の顕現であって、神のエネルギーによって生み出され、像を結んだものなのである。⁽⁶⁾

そして、悪は神自身の内的性質である「永遠の自然」(ewige Natur)と呼ばれる存在の一領域に、その起源をもつのである。⁽⁷⁾ 具体的には、「永遠の自然」のうちの神の怒りの性質によって成立する領域「第一プリンキピウム(原理)」が、悪の直接的な起源である。第一プリンキピウムの神の怒りとは、内に向かって収縮する力と、それに反発して外へ出ようとする力が対立し、緊張が高まって鬱積される破壊的なエネルギーのことを意味する。旧約聖書において「妬み深い神」といわれる、神の中であって神とは呼べないような、恐ろしい神の闇の原理である。

だが、ここで肝心な点は、悪の起源は確かに第一プリンキピウムにあるが、第一プリンキピウムそのものが悪であり、神の性質が即悪である、とペーメは考えていないことである。「憤怒(Grimmigkeit)」の中に、生命とあらゆる運動性の始源があ

る⁸⁾」と述べているように、ベームによれば、生命誕生の基底には破壊力をもつほどの充溢したエネルギーが不可欠なのだ、この凄絶な憤怒と呼ばれるエネルギーは、神の内なる世界では「第二プリンキピウム」を形成する神の愛の性質へと変容、移行していくという⁹⁾。イエス・キリストの愛と光の領域である第二プリンキピウムにおいては、第一プリンキピウムで鋭く対立していた力の間に調和と統一がもたらされ、それによって、生命は神の内部で身体性を獲得し、形をなすのである。換言すれば、いかなる根拠、支えをも持たない底無し¹⁰⁾の神自身の顕現の運動の第一段階として、神の怒りと愛の性質、闇と光の両世界が展開するのである。矛盾する神の両性質は互いにその存在を知らないが、解けることのない紐帯で結ばれ、一方が欠ければ他方も存在しないという関係にある。

それに対して、ベームによれば、悪とは第一プリンキピウムから第二プリンキピウムへ移行することがなく、破壊的なエネルギーそのものとして顕在化したものである¹¹⁾。いわば、永久に光が射し込まない闇、和解除し愛に変わることはない憤怒の火が、悪である。したがって、悪は第一プリンキピウムそのものではなく、悪の起源が第一プリンキピウムであって、悪が顕現する可能性が神の第一プリンキピウムの中に潜在的に秘められているといえよう。悪が実在する究極の根拠は神

であるが、悪の顕現を神が意志する訳ではないのである。

2. 天使ルチファアの墜落

それでは、神の「永遠の自然」の第一プリンキピウムから第二プリンキピウムへの移行の可能性がなくなり、悪が顕在化するのとはどのような場合なのであろうか。

この点についてベームは、聖書に基づく神話的な形象の一つである墮天使ルチファアを受容し、ルチファアについて新たな解釈を加えながら、悪の顕現の問題を考察している。キリスト教の伝統において、ルチファアは天上の最も美しい天使として神によって創造されたとされる。ベームによれば、そもそも天使とは第一プリンキピウムの沸き上がるガイスト（神の霊）によって創造され、解けることのない紐帯によって第二プリンキピウムの天上の国（パラダイス）に移行し、神の光に照らされ喜びに満ち溢れて「愛の戯れ」（Liebe-Spiel）を体現し、永遠にパラダイスに留まるべき存在だった¹²⁾。ところが、ルチファアは己の美しさと力強きゆえに驕慢になり、神に背く。ベームはルチファアの反逆を次のように描写している。

ルチファアは第一プリンキピウムに王として立っている自分を見たので、神の心の誕生とその柔和さと愛に溢れた性

質を軽蔑して、第一プリンキピウムにこそ優れて力強く恐ろしい主(Em)が存在するのだと誤って考え、火の力のうちに自分を引き入れて火の性質になろうとした。神の心の柔和さをルチファーは嘲り、自分の想像力をその中に置くこととはしなかった。だから、主の言葉から食べ物を得ることができず、ルチファーは光を失った。したがって、パラダイスで吐き気を催させる存在になるやいなや、ルチファーに付き従う全軍勢とともに、彼は天使の王の座から吐き出されたのである。⁽¹²⁾

ここで「神の心」と言われているのは、子なる神イエス・キリストのことである。ペーメによれば、ルチファーは、神が怒りと柔和さや愛という相反し矛盾する性質を合わせ持つことが理解できなかった。そして、神の愛の性質を軽蔑し、峻厳で恐ろしい怒りの性質だけで神の性質として十分だと考えた。つまり、紐帯で繋がる永遠の自然の両プリンキピウムを分離し、第一プリンキピウムのみを神の内なる世界として、自らその闇の世界に君臨しようとしたのである。その結果、ルチファーは神の激しい怒りを買ひ、光の世界を追われて、永遠に闇の世界に閉じ込められる。これは、悪の起源ではあっても、悪そのものではなかった第一プリンキピウムが、悪として顕在化することになってしまった状況を表している。神

の意志に反逆したルチファーによって、神の内的世界のバランスが崩されたのである。

そして、天国と地獄、光と闇に分裂した永遠の自然の外側に、新たに「第三プリンキピウム」であるこの世界の創造(天地創造)が行われたのである。「なぜ、ルチファーの反逆を神は許したのだらうか。(…)ルチファーは第三プリンキピウムの誕生の原因であるといえるので、そうであればこそ、キリストもまたルチファーをこの世の王と呼んだのである。⁽¹³⁾」とある通りである。

このように、ルチファーが神に反逆しパラダイスから墜落することがなければ、第三プリンキピウムとしてこの世界が創造されることはなかった、ルチファーに体現された悪こそが我々の生きる世界が創造される直接の契機となった、とペーメは考えている。そして、世界には、その誕生のはじめから神の光と闇の両性質が注ぎ込まれ、大地は悪に汚染されているという。⁽¹⁴⁾ 悪の顕現がなければこの世界が存在することはなく、その成立からいって、万物は悪と善の両方の性質を必然的に抱えている、というラディカルな認識をペーメは持っているのである。

3. 最初の間人アダムの完全性と転落

これまで形而上の悪がこの世界の成立にまで深く関与して

いるというペーメの見解をみてきた。では、人間の実存と悪の問題をペーメはいかに考えているのだろうか。

創世記のアダムは最初の人間である。そのアダムが神の戒めに背き罪を犯したことを、ペーメは単なる神話として理解していない。墮罪前のアダムとは人間のうちの無垢、汚れなさを意味し、そしてアダムにおいてすべての人間が罪を犯したのである。アダムの原罪の物語は、それゆえにペーメにとっては自分自身のことであり、人間の実存の真実を普遍的に映し出しているのだと彼は認識している。したがって、ペーメは創世記の記述に沿ってアダムの原罪を考察することを通じて、人間と悪の問題について思索する。次にその内容をみてみよう。

ルチファーが墜落したために、神は第三プリンキピウムに「神の似姿」(Gottes Ebenbild)としてアダムを創造する。神の似姿とはどういう意味か。ペーメによれば、神の自己顕現の意志がアダムとして像を結んだのである。三位一体の神やルチファー、この世界の自然など、多様な像を生んだ神のエネルギーが最後にアダムに凝縮し、神の内部で対極にある闇と光の原理が、最も深まり最も鮮明になった形で、アダムとして顕現したのである。その上アダムは、神の顕現像の一つである宇宙(マクロコスモス)に対して、その一切を内包するミクロコスモスでもある。すなわち、アダムにおいて、神の

顕現運動の全体が真に実在的になる。人間存在なしには、神の自己顕現の完成はあり得ないのである。

ペーメはアダムが完全な人間として創造されたことを強調する。転落する以前の原初のアダムは、「男でも女でもあり、そのどちらでもなく、完全な純潔性、しとやかさ、清らかさを持った乙女(Ungfrau)であり、つまり神の似姿だった。」⁽¹⁵⁾とあるように、旧約聖書の知恵文学の伝統から生まれた、神のパートナーであったソフィアがアダムの内に寄り添っているという、両性具有の存在とされている。つまり、原初完全な人間とは、男女の性を超越した存在なのである。さらに、アダムの完全性は内臓や恥部をもたず、睫のない目ですべてを見通し、眠ることなく、神の代わりに各々の動物の性質に依って名前をつけることができる、などといった特徴によっても語られている。⁽¹⁶⁾

だが、転落によってアダムのそうした完全性は失われてしまふ。転落は、アダムの眠りと、アダムとエヴァが禁断の木の実を食べるといふ二段階にわたって緩やかに起こる。そこにペーメ独自の原罪解釈がみられるのである。

まず、アダムが動物たちに名前をつけた後、深い眠りに落ちた(創22)のは、アダムをめぐって神と悪魔とこの世の自然の三者が争った結果なのだとする。アダムは、悪によって汚染された、神の内的世界の回復のために創造されたのだが、

アダムの内には神、悪、自然の三つの要素が誕生の初めから含まれていた。なぜなら、彼は神の似姿であると同時に、地の塵から作られたために、ルチファアの墜落によって悪に汚染された大地の性質も身に帯びていたからである。したがって、以下の引用にみられるように、アダムは自己の内面に存立する「三つの王国」に呼びかけられると、そのすべてに反応し、内部分裂を起こして、疲労困憊し眠ってしまったのである。

アダムの内には三つの王国がある。アダムの外にもある。そして、エセンチア（性質）のうちで激しい争いになった。アダムの内でも外でも、あらゆるものがアダムを引き寄せ、自分のものにしようとした。なぜなら、アダムは自然の一切の力の粋を集めた大いなる人間だったからである。⁽¹⁷⁾

このように眠りと全く無縁だったアダムの深い眠りとは、アダムの完全性が徐々に損われ、神の似姿としての独立性と荣光に陰りが見え始めている事態を意味している。アダムのパートナーとして彼の内にいたソフィアは、悪や自然にも惹かれる彼に失望し、アダムのもとを去る。⁽¹⁸⁾ 神はアダムが眠っている間に、彼の肋骨からエヴァを作り出す（創2:22）が、そのエヴァを契機として第二の転落が起こる。

しかし、アダムが眠りから目覚めた時、アダムは人間でもはや天使ではなかった。(…) アダムはエヴァが女であり、自分の中から取り出されたことを知った。そして、エヴァを抱き締め、あらゆる動物がなすのと同じく、彼女と結ばれた。けれども、彼はまだ澄んだ瞳をしていた。(…) アダムは大いなる喜びのうちにエヴァとともにエデンの園を歩き、そこで善悪を知る木の実だけは食べてはならない、という神の戒めをエヴァに伝えた。しかし、この世の女であったエヴァは、アダムの言葉に注意を払わず、アダムから離れて物欲しそうに木をじっと見ていた。すると、彼女は次第に欲情の虜となって、悪魔の声とは知らずに悪魔の囁く嘘に耳を傾け、木に手をかけ木の実をもぎ取って、四つのエレメントと星辰の実を食べて、アダムにも一つ手渡した。アダムはエヴァが死なないのを見て自分も食べた。すると二人の眼は開かれ、自分たちが肉と血をもち裸でいるのを知った。なぜなら、大いなる世界のガイストは、二人を四つのエレメントで捕え、彼らに胃と腸を与えたからである。(…) 二人は互いを見つめあって恥ずかしくなり、自分たちに注がれる怒りが恐ろしくなった。というのも、それは神の怒りだったからである。⁽¹⁹⁾

神はアダムの「助け手」が必要だととして、アダムにエヴァを授ける。これによりアダムは両性具有の身体を完全に失い男女に分裂した。ペーメは、性の分裂を神の意志に背き樂園を追放される悲劇の要因と捉えている。アダムから作り出されながらも、アダムから独立した別個の存在であるエヴァは、彼とは異なった意志と心性を持ち、結果的にはアダムの助け手ではなく、「アキレス踵」になってしまう。悪魔に誘惑されて、アダムに罪を犯させる役割を彼女は担ったのである。こうして地上に転落した人間は、苦勞して日々の糧を求め、アダムとソフィアの両性具有の完全な一体性に憧れては性の営みを繰り返し、カインの弟殺しのように、悪事に手を染めるようになっていったのである。

ペーメは、アダムの転落について、「悪への誘惑」という視点を重視している。明瞭に神に反逆する意志を持っていたルチファーと比較すると、アダムは積極的に神に背こうとした訳ではなく、悪に引き寄せられ、誘惑の罠に陥って最終的に神から離反した、といえよう。ルチファーが神の内的世界に創造されたにも拘らず神に造反した、いわば絶対的な悪の体現、具象化だとすると、神の外の世界に創造され神だけではなく、悪や自然からの影響も受けているアダムは、自分にはどうすることもできない力に屈したことによって、悪に手を染めたといえる。また、両性具有の存在でなくなることで、墮

罪を結びつけた原罪解釈にも、人間にとって生得のものである性をめぐる、人間の苦悩を見つめるペーメの視線が感じられる。このようにペーメは、不安定な人間存在のその深淵を覗くかのように、悪とは本質的に人間の力でコントロールできないもの、人間を越えた絶対的なものだと考えている。そして、悪からの暗い牽引力に抗し切れずに惑われて罪を犯すことを、人間の悲劇として捉えているのである。

だが、アダムが神に背き樂園を追放されたことによって、人類の歴史が始まるのであるから、悪は宇宙や万物の創造だけでなく、人類の歴史にも重要な役割を果たしていることになる。なぜなら神に背き悪をなす自由がなければ、人間の生の営みを、神から独立した人間固有のものとみて、歴史を語ることはできないからである。同時に、悪に因る苦悩が、もはや樂園にいられなくなったこの世のあらゆる存在者に避けがたくついてまわるのも事実といえよう。したがって、悪に由来する苦悩からの救いが求められるのである。ペーメによれば、人間ばかりでなく、悪に汚染されたまま、アダムの転落によって救われることなく放置されている自然も救済を求めているという。⁽²⁰⁾

4. 第二のアダム——イエス・キリスト

では、ペーメは悪からの救いについて何を語っているのだ

ろうか。

最初の人間アダムが転落したあと、人間と自然の救済のために神から送られたのが、神の子にして人の子であるイエス・キリストである。創世記に「女のすえが蛇の頭を踏み砕く」(創3:15)とあるが、ペーメによれば、この女のすえとはイエスのことなのである。「神が天国でアダムとエヴァに蛇を踏み砕く者について語った言葉は、生命の光の玉座において形づくられ、(…)聖なる人間の心情に敏感に感じられた。まさにその言葉が人間となったのである。そして、神の言葉は再び神の智の乙女のうちに入って行った。⁽²¹⁾」「第二のアダムは人間になることによって魂を再び導き、愛と義において天上の子として魂を神の言葉と結びつけた。⁽²²⁾」という。

第二のアダムであるイエス・キリストにならって、神の意志に逆らうエゴを捨てる自己否定を、一人一人の人間が自らの自由な決断で選び取ることによって、救いはもたらされるとされる。アダムから離れ去ったソフィアも、再びイエスと一体になり、イエスを做ぶ、再生した人間の内面に戻ってくる。なぜなら、ルチファーに体现された悪は、己を頼みとする傲慢によって神に反逆した意志なのであるから、意志の方向を再び神へ向けることによってのみ、つまり謙虚さや柔和さと愛によって神の意志を受け入れることで始めて、人間の救済は実現する。そして、神の意志を受け入れ、再生した人

間の力で自然にも救いがもたらされる、とペーメは考えている。人間は善と悪、愛と憎しみ、光と闇の双方に対して開かれた存在であり、どちらに進むかは人間の自由な意志に委ねられているのである。

5. 結びにかえて

ペーメは、否定的な原理である悪が存在するとしただけではなく、その積極的な意義を認め、神の自己顕現によって、存在が確立していく神の運動全体の中に、悪を位置づけることを試みた。「悪がなければ、あらゆる存在、生命はない」と彼は明確に主張した。悪とは、人間の理解の及ばない、神の闇闇に由来する圧倒的なエネルギーであり、人間の実存に纏わる苦悩の源泉であるが、悪を通じてこそ、逆説的に人間は愛の本質に接近し得るのである。

ところで、カントは『理性の限界内における宗教』の中で、「悪は我々自身の行為であるにも拘らず、なぜ我々の内で悪がまさしく最高の格率(Maxime)を腐敗させたのかについて、我々の本性に属する根本性質についてと同様に、原因を示すことはできない」と述べて⁽²³⁾、人間のうちの悪の根拠は、理性では認識できないことを認めている。また、人間本性のうち、に悪への性癖として、深く普遍的に根づいている、生得的な、にも拘らず自らの行いによって招かれた悪は「根源悪」と呼

ばれる。⁽⁶⁴⁾ この根源悪という概念から、悪に誘惑されて転落したアダムを思い浮かべることは自然である。カントは悪について考察した際、理性の対象とし得る範囲に限定し、それ以外のことには沈黙したが、根源悪の概念は人間の内にありながら、人間を越える形而上の起源を有し、人間に働きかける悪の本質を示唆しているように思う。

さらに、バーダーを介しペーメの思想に触発されたシェリングは、『人間の自由の本質』において、「悪の可能的原理である神の根底は、神の愛の意志が実現する条件であり、神の実存の条件である人格性は、悪がなければ存在しない」、「人間の間に苦悩する神という概念なしには、全歴史は不可解なままである」という趣旨のことを述べている。⁽⁶⁵⁾ こうした思惟のうちには、ペーメからの濃厚な影響が窺われる。

ペーメの悪の思索は、ルチファアヤアダムといったキリスト教の神話的形象に依拠しつつ、形而上の悪と関連させて考察した点にその著しい特色がある。概念をもとに思想を構築していくカント等近代思想史の旗手たちの言語表現に比べて、いわば尽きることのない物語を展開していくといったペーメの表現スタイルだけをとっても、現代の私たちにとって風変わりな理解しにくい面があることは否めない。しかし、悪に関してペーメの思想が観念論等のうちに影響を与えているのもまた事実である。したがって、ペーメの悪の思索を、悪の

起源、自由と必然、人間の行為と悪、神の意志と歴史、性の分裂の悲劇といったテーマへの問題提起と捉え、近代思想史との関連で詳細に考察していく試みが重要であると思われる。

テクスト

Jacob Böhme *Sämtliche Schriften*, faks. Neudr. der Ausgabe v. 1730, 11 Bde., beg. v. August Faust, neu hrsg. v. Will-Erich Peuckert, Stuttgart 1955-1961.

引用した著作の略記号は以下のとおりである。

3P: *De tribus principis, oder Beschreibung der Drey Principien Göttliches Wesens*, 1619.

3F: *De Triplici vita hominis, oder vom Dreyfachen Leben des Menschen*, 1620.

GB: *Theosophia oder Die hochtheure Porte von Göttlicher Beschaulichkeit*, 1622.

MM: *Mysterium Magnum, oder Erklärung über Das Erste Buch Moses*, 1623.

注

(1) 3P Vorrede, 13. 以下、引用の訳はすべて筆者による拙訳である。

- (2) 3P 4, 33.
 (3) MM 3, 1.
 (4) GB 1, 7.
 (5) Vgl. 3P 14, 75.
 (6) Vgl. MM 1, 2ff.; 5, 10.
 (7) Vgl. MM 2, 7ff.; 3, 1.
 (8) 3P 1, 8.
 (9) Vgl. MM 4, 1ff.; 5, 1ff.
 (10) Vgl. 3P 4, 73ff.
 (11) 3P 4, 67ff.
 (12) 3P 4, 70.
 (13) 3f 8, 23.
 (14) Vgl. 3P 5, 14ff.
 (15) MM 18, 2.
 (16) Vgl. 3P 10, 10ff.
 (17) 3P 11, 33.
 (18) Vgl. 3P 13, 2.
 (19) 3P 17, 58ff.
 (20) Vgl. 3P 14, 33.
 (21) 3P 18, 40.
 (22) 3P 18, 52.
 (23) Immanuel Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen*

Vernunft, hg. von Karl Vorländer, Hamburg 1956, S. 32.

(24) ders., a. a. O., S. 33.

(25) F. W. J. Schelling, *Über das Wesen der menschlichen Freiheit*, hg. von H. Fuhrmann, Stuttgart 1964, S. 122ff.

中译本

Ernst Benz: *Der vollkommene Mensch nach Jakob Böhme*, Stuttgart 1937.

Hans Grunsky: *Jacob Böhme*, Stuttgart 1956.

Christoph Geissmar: *Das Auge Gottes Bilder zu Jakob Böhme*, Wiesbaden 1993.

John Schulitz: *Jacob Böhme und die Kabbalah*, 1993.

Wilhelm Schmidt-Biggemann: *Philosophia perennis*, Frankfurt am Main 1998.